菅茶山遺稿

――伊沢蘭軒旧蔵伊沢柏軒外三名手写伊沢榛軒手校和田万吉手識本――

柏崎順子

菅茶山の作品は『黄葉夕陽村舎詩』八巻附録「恥庵詩草」二巻五冊（文化九年晩春刻成）、『黄葉夕陽村舎詩後編』八巻四冊（文政六年十一月刻成）、『黄葉夕陽村舎詩遺稿』七巻附録「公寿詩草」一巻・『黄葉夕陽村舎文遺稿』四巻合四冊（天保三年四月刻成）、および『花月吟』一巻一冊（文政十一年正月刻成）に収められて刊行されているが、本稿に紹介する『菅茶山遺稿』不分巻二冊は、上冊に二百五十八首、下冊に三百三十三首、計五百九十一首の茶山の作品を収める漢詩集で、しかも、その五百九十一首のうち、上冊に収める「花月吟」二十首と「斉藤文貫武立君来訪、分得韻東」一首、下冊に収める「臨江仙」一首を除く五百六十九首は刊本未収録の作品で、茶山自筆の稿本の存否が知れぬ現在、刊本の欠を補う資料として有力であるばかりでなく、森鷗外『伊沢蘭軒』（『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』、一九一六―一七年）や、富士川英郎氏『菅茶山』（『海燕』一九八四―九四年）の記述の不備を補う資料としても注目されるべきものである。全冊の翻刻を計画しているが、本稿においては、本書の伝来と成立事情の概略、資料価値の一端を報告しておく。

§

本書は茶山を篤く慕っていた伊沢蘭軒の所蔵本である。本書各冊の一丁表右下に蘭軒の蔵書印「伊沢氏／酌源堂／図書記」が押捺されている。ほかに印記はない。蘭軒没後も本書は伊沢家に蔵せられていたのであろう。

伊沢家が本書を手放したのは、明治三十八年十一月二十四日に蘭軒の孫磐が没しており、おそらくその後のことであろう。明治四十一年四月、本書は書誌学者和田万吉の所蔵するところとなった。本書下冊の後表紙見返しに、無署名ではあるが、和田とおぼしき手蹟で、「伊沢信厚蘭軒信道後嗣也。蘭軒太好読書。／其家多蔵古典珍籍。載在経籍訪古志。／巻首所捺酌源堂印記蘭軒所用也。／明治戊申初夏獲此書、題一言於巻尾。」と墨書してある。蘭軒の名を「信道」と記しているのは和田の錯誤で、正しくは「信恬」である。また、本書の帙題簽に『菅茶山遺稿　天野景範等手写／伊沢榛軒自筆校合／和田万吉旧蔵　二冊』と墨書してある。筆者は不明であるが、右の識語の手蹟から推しても、「和田万吉旧蔵」の所伝は信憑するに足るとしてよいかと思う。和田は、鷗外の『伊沢蘭軒』に先んじて、『図書館雑誌』第二十四号（一九一五年三月）に「集書家伊沢蘭軒翁略伝」を発表し、蘭軒を顕彰したことでも知られている人物である。不幸な運命を辿る本が多いなかで、本書は落ちつくべきところに落ちついたといえよう。

和田の識語は本書下冊四十五丁（最終丁）裏に墨書された蘭軒の嗣子榛軒伊沢信厚自筆の識語、「右菅茶山遺稿二巻山室子彦／所蔵也。仮筆於及門生天野景範／内山行・有馬順及家弟信重／使謄写。以朱筆校合者予所下／手也。文政戊子九月伊沢信厚／記於楡枋書屋」に署名している「伊沢信厚」と、各冊一丁表右下に押捺されている蔵書印について解説し、後人の注意を喚起しようとしたものと察せられる。榛軒の識語中、「戊子」とあるのは「戊子」の誤記であること、指摘するまでもあるまい。また、榛軒は「二巻」と記しているが、本書の藍本山室子彦所蔵本の体裁はあるいは二巻二冊であったのかもしれないが、本書は、藍本の内題等を省いて、本文のみ、すなわち茶山の作品のみを書写したものであるから、既述のように不分巻二冊とするのが書誌学的には妥当であろう。子彦所蔵本の存否は不明である。

榛軒の識語によれば、本書は、文政十一年戊子九月に、門生天野景範・内山行・有馬順と榛軒の弟柏軒伊沢信重の四名が子彦所蔵本を分担書写したものを、榛軒が校正し、製本したものということになる。表紙は手製で白紙に代赭を格子状に塗ったものを使い、本文の用紙も粗末なものを使っている。本書各丁の手蹟を検討してみたと

ころ、上冊一丁表から同三十九丁裏までの三十九紙を第一の者が、上冊四十丁表から下冊五丁裏までの十九紙を第二の者が、下冊六丁表から同十五丁裏までの十紙を第三の者が、下冊十六丁表から同四十五丁裏までの三十紙を第四の者が担当したことが判明した。このうち、下冊六丁表から同十五丁裏までの十紙を担当した第三の者が柏軒であることを、慶応義塾大学医学メディアセンター蔵『柏軒雑記』等、柏軒自筆本と照合することによって確認することができたが、識語にあげる門生三名の担当箇所は特定するにいたっていない。また、三名の素性も判明していない。ただ鷗外は、『伊沢蘭軒』その百七十八に、文政十年三月二十九日、「蘭軒は天野樵墩、子柏軒の二人と共に郊外に歩し、」（『鷗外全集』第十七巻、岩波書店、一九七三年、三八四頁）と記し、「樵墩は蘭軒門人録に（天野道周　横須賀）がある。恐らくは其人であろう。」（同上）と述べている。本書の書写者の一人天野景範は、あるいは樵墩と同人かもしれない。また、朱筆をもって校正したのが榛軒であることも、榛軒の識語の手蹟等と照合して確認している。

本書の藍本子彦所蔵本の成立事情については、本書下冊四十五丁（最終丁）表に移写されている子彦所蔵本の識語、「文政壬午暮春中浣、写於黄葉夕陽村舎南寮／為山室君子彦。／辱交断蓬子惟穆清風。」によってほぼ明らかである。壬午は五年である。子彦所蔵本の書写者断蓬子惟穆清風は伊予大洲の曾根静斎であろう。『菅家往問録』（『広島県史　近世資料Ⅵ』広島県、一九七六年）に、「文政丁亥三月十日来謁／予州大洲　曾根静斎　名穆　字清風」（一一二七頁）と記載されている。丁亥は十年である。『黄葉夕陽村舎詩後編』巻之七に「伊予曾根清風・鷲野伯熙・讃岐浄雲美作茂誥子惕大爺侃仲同時過訪分得韻魚」、続いて「曾根清風指庭花索詩卒賦以呈」という詩を載せているが、この時、文政十年三月十日の作であろう。

本書の藍本の所蔵者山室子彦に関しては、鷗外が『伊沢蘭軒』その百八十五に、浜野・福田両氏に聞くところとして、「名は俊、通称は武左衛門、汲古と号した。其父名は恭、箕陽と号した。」（三九九頁）と述べている。『誠之館百三十年史』（福山誠之館同窓会・誠之館百三十年史刊行委員会、一九八九年）によれば、福山藩士で、後に儒者本役に進んだという。また、鷗外は、富士川游

旧蔵蘭軒自筆稿本『蕤斎詩集』の文政十一年七月と八月との詩の間に、「送山村士彦帰福山」、「恭次高韻、時駕将帰藩」の二詩があることを指摘して、「山村は恐らくは山室の誤であらう」（三九八頁）と言い、また、「送山村士彦帰福山」の一節を引いて、「士彦は曾て菅茶山の塾にゐて、後に藤某の門に入った。その甲申の歳に神辺にゐた子彦なることは復疑を容れない。藤某は恐らくは佐藤一斎であらう。」（同上）と述べて、子彦が本書が成立する一、二箇月前まで江戸にいたことを明らかにしている。「甲申の歳に神辺にゐた子彦」というのは、『黄葉夕陽村舎詩遺稿』巻之四に載せる「病中七夕、山室子彦・河村士郁来、分得韻侵」（七丁裏）を指すのであろう。茶山に学んでいた子彦は、文政七年甲申七月以後、出府して佐藤一斎に学んだが、本書が成立する前に帰国したというのである。帰国の理由と時期について、鷗外は、「送山村士彦帰福山」の一節、「節惟当孟秋。忽爾説帰思。非是相莓鱸。昨逢郷信寄。家翁報抱痾。胸臆真憂悸。」を引いて、「子彦が郷に帰るのは、父の病めるが故である。そしてその発軔は七月中であった。」（同上）と述べている。『蕤斎詩集』の所在が不明であるため、鷗外の所説を検証することができないが、鷗外が引用する右の一節をもって「其発軔は七月中であった。」と断定するのはやや早計ではないかと思う。右の一節は山室子彦が父病むの報に接して帰郷を決意したのが七月であったことを語ってはいるが、江戸を去った時期については何も語っていないからである。「送山村子彦帰福山」の次に載せる「恭次高韻、時駕将帰藩」は、蘭軒が「阿部正寧に次韻した詩」（三九九頁）であるという。子彦が江戸を去った頃、藩主阿部正寧も駕を発して国元へむかったということになる。とすれば、子彦は単独で帰国したのではなく、藩主に扈従して帰国したはずである。藩主の国元下向が予定されているのに、藩士が個人的な事情でその警護の列に加わらず、単独で帰国することを藩庁が許可するはずがないからである。鷗外の叙述からは「恭次高韻、時駕将帰藩」は「中秋無月」の前に載せてある詩と考えられる。そうであれば、正寧の発駕は八月前半のことであったかもしれない。鷗外も正寧の発駕に関しては必ずしも七月中とは考えていないようである。正寧の発駕の日時を明らかにする資料が発見されていない以上、子彦が江戸を去ったのは、七月か、遅くも八月

前半のこととしておくのが無難であったのではなかろうか。

榛軒が本書の藍本を子彦から借り請けたのは、子彦が江戸を立つ前のことであろう。本書が成立したのは同年九月だからである。榛軒が本書の藍本を子彦が所蔵していることを知ったのはいつか、明らかでないが、それを借り請けて書写することを決意したのは、子彦が帰国すると知ったからと察せられる。茶山は、その前年文政十年八月十三日に死去している。茶山を追慕する父蘭軒が刊本未収録の五百六十七首を収める子彦所蔵本に強い関心を示していることを知った榛軒が子彦に懇請し、追って国元へ逓送する約束で子彦所蔵本を借り請けて柏軒等に書写せしめ、自ら校正して父に献呈することにしたのではなかろうか。

本書の書名「菅茶山遺稿」は榛軒の命名であろう。既述のように本書の藍本子彦所蔵本は、茶山が健在であった文政五年三月に成立したものである。茶山健在の時に、書名に「遺稿」を用いるのは穏やかではない。書名「菅茶山遺稿」は、茶山の死後、すなわち本書の成立時に命名されたに違いないと考えるからである。

本書は藍本の内題等を省いて本文のみ書写したものであると記述したが、実は本文の大尾、下冊四十五丁表の断蓬子惟穆清風の識語の前に、子彦所蔵本の尾題と思われる「黄葉夕陽村舎拾遺終」一行が移写してある。『黄葉夕陽村舎詩後編』の板刻が成るのが、子彦所蔵本が成立した翌年の文政六年十一月である。子彦所蔵本が茶山自筆の稿本に就いて、刊本未収録の作品を選んで書写したものであるとすると、子彦所蔵本の書名は、「黄葉夕陽村舎（詩）拾遺」であった可能性は極めて高いと思われる。榛軒は、茶山の生前に刊行された『黄葉夕陽村舎詩』、『黄葉夕陽村舎詩後編』におさめられた作品と子彦所蔵本に収められた作品とがほとんど重複していないことを知って、藍本の書名に更えて、本書に「菅茶山遺稿」と命名し、父蘭軒に献じたのではないだろうか。

§

刊本未収録の茶山の作品が五百六十九首収めてあると言えば、それで本書の資料的価値は明らかであろうが、本書を披閲して気付いたことの二、三を以下に述べておく。

榛軒の父蘭軒は、文化三年三十歳のとき、長崎奉行曲淵景露に随伴して長崎に遊んだ。蘭軒の長崎行については、鷗外が『伊沢蘭軒』その二十九以下に詳述している。鷗外が依拠した主な資料は武田科学振興財団杏雨書屋蔵富士川游旧蔵蘭軒自筆稿本『長崎紀行』と、現在所在不明の富士川游旧蔵蘭軒自筆稿本『蕤斎詩集』とであるが、蘭軒が神辺を通過する前後三日の記述においては、鷗外は『黄葉夕陽村舎詩』巻之八を参照して遺漏のないようにつとめている。蘭軒は発程第二十七日の六月十六日に七日市に宿した。その晩茶山は国境を越えて七日市に蘭軒を訪ね、夜を徹して歓談した。鷗外は『蕤斎詩集』に、その夜、蘭軒が茶山に次韻した「宿七日市駅、菅先生自神辺駅来訪、有詩、次韻賦呈。昔年自嘗賦分離、何料今宵有此期、尤喜詞壇一盟首、厳然不改旧霜髭、」を載せること、引首の「訪」字の傍らに茶山が「迎か要か」と注していることを指摘して、「茶山が境を越えて蘭軒を七日市に訪うたのは、蘭軒を神辺の家に立ち寄らせようとして案内のために来たのだということが、この推敲のあとに徴して知られる。」（八二頁）と述べ、そのとき茶山が蘭軒に贈った詩を『黄葉夕陽村舎詩』に載せないことを遺憾として、「当時茶山が蘭軒に贈った原唱は集に載せない。」（同上）と記している。

鷗外が集に載せないことを遺憾とした茶山の「原唱」が、本書下冊二十丁表に収める「七日市逢伊沢澹父。都亭把酒惜分離、不奈前期不可期、今夜雄神川上月、無端来照両吟髭」であることは明らかである。澹父は蘭軒の字である。起句は『黄葉夕陽村舎詩』巻之七、九丁表に載せる「都梁觴余蓮池」七絶一首が作られた日のことをいうのであろう。都梁は蘭軒の別号である。

六月十七日、茶山の求めに応じて、蘭軒は黄葉夕陽村舎を訪れた。鷗外は『蕤斎詩集』に「過神辺駅、訪菅先生夕陽黄葉村舎、柴門茅屋、茂園清流、入其室則窓明軒爽、対山望田、甚瀟灑矣、先生有詩、次韻賦呈。田稲池蓮美且都、柳陰風柝架頭書、鳥啼山客猶眠熟、便是網川摩結廬」一首を載せることを指摘して、ここでも「原作は茶山の集に載せない」と憾みを述べている。

その原作もまた、本書下冊二十丁表、「七日市逢伊沢澹父」の次に載せる「伊沢澹父過廉塾。儂居西備子東都、百歳徒憑雙鯉書、却喜人間無定跡、今朝忽漫到吾廬」であることは疑う余地はない。

鷗外が記述の整わないことを遺憾とした以上二つの問題を本書は解決してくれたのである。本書の存在自体、『伊沢蘭軒』の記述を補う新事実として注目されるのであるが、本書所収の茶山の作品の幾つかもまた同書の記述の不備を補うに足るものであることは、右の例をもってしても容易に推察されるであろう。

また、本書所収の作品は、茶山のはじめての本格的伝記として知られている富士川英郎氏『菅茶山』（福武書店、一九九〇年）の記述を補うに足る新事実を提供する資料としても注目されるものである。『菅茶山』は、黄葉夕陽村舎文庫所蔵の茶山の日記を主な資料として、茶山の生涯と、刊本所収の茶山の作品が作られた背景とを明らかにしたものである。当然のことながら、日記の欠けている時期の記述には、筆者の努力にもかかわらず、異論の生じる余地があるものが含まれている。本書はその点に関しても考える手懸りを与えてくれるのである。

八十歳の生涯のうち、茶山は二度出府している。いずれも藩主阿部正精に召し呼ばれての東役である。そのうち、初度の東役において、茶山が神辺を立ったのは享和四年（文化元年）正月二十一日であることを富士川氏は茶山の日記に徴してはじめて明らかにしたのであるが、同日以後の茶山の日記が失われてしまったために、茶山の江戸到着を同年二月二十日頃と推測したのは、異論があってしかるべきところかと思う。神辺から江戸までおよそ百九十三里に三十日を費やしたということになるからである。物見遊山の旅ならばともかく、藩主に召し呼ばれての公用旅行にしては日数をかけ過ぎているということになるのではなかろうか。この年の正月は大の月であった。

北条霞亭が藩主阿部正精に召し呼ばれて出府したときの旅程は、鷗外『北条霞亭』（『鷗外全集』第十八巻）その百四十一によれば、文政四年五月十日に神辺を立ち、同年六月二日に江戸に到着、所要日数二十三日であったという。（四四四頁）この年の五月は大の月であった。鷗外は霞亭が弟碧山にあてた四月二十二日付、六月四日付両通の書簡を証として右のようにいうのであるが、富士川氏は、『菅茶山』に、霞亭の発程は五月十一日であったと記述している（下巻四四一頁）。証拠を示していないが、茶山の日記によったのであろうか。富士川説によれば所要日数は二十二日ということになる。

また茶山の初度の東役の帰路の旅程は、『黄葉夕陽村舎詩』巻之七に載せる「晨出都邸　十月／三日」（十一丁裏）、「入境　十一月／五日」（十四丁表）によって、所要日数二十三日であったこと、『伊沢蘭軒』『菅茶山』両書とも認めている。この年の十月は大の月であった。両書にいうように、初度の旅行の帰路は藩主阿部正精に扈従して茶山は帰国したのである。藩主でさえ二十三日で旅している道程を、いくら藩主の信任が篤かったとはいえ、茶山が三十日も費やして出府したというのは容易に首肯しかねる説であること明らかであろう。藩士が公用で江戸・福山を往反する場合の所要日数は藩の規定に定められていたはずである。規定に定められた所要日数が藩主の参勤交代の所要日数より多かろうはずがない。

富士川説に疑問をもつもう一つの理由として、『菅茶山』に、茶山が発程第五日の正月二十五日に兵庫についていることを同日付松下敬二宛茶山書簡を証として明らかにしていることをあげておく（上巻四四八頁）。神辺から兵庫までおよそ五十里、茶山は一日十里の歩度で東行しているのである。この歩度を維持して歩み続けたとすれば、所要日数二十日、二月十日頃に江戸に到着しているという計算になる。

富士川氏は、蘭軒が長崎奉行曲淵景露に随伴して長崎に向かったとき、発程第二十八日に神辺をよぎっていることや、茶山の再度の東役の往路の旅程が文化十一年五月六日に神辺を立ち、六月五日に江戸到着、所要日数二十九日であることを参考にして説を立てたのであろうが、前者は長崎奉行が任地に赴く旅で、藩士の公用旅行の参考になる例とはいえず、後者もまた参考にならぬ事例と考える。なぜなら、再度の東役は、『菅茶山』が明らかにしているように、はじめ茶山は病を理由に辞退したが、病癒えるにおよんで止むなく命をうけたという事情のもとに行われたものだからである。再度の東役の往路の旅程は、高齢（六十七歳）で、しかも病みあがりの茶山を強いて江戸に召し寄せるための特別のはからいによる例外的事例とみるべきものであろう。

初度の東役の往路の旅程を推測する際に、参考にすべきは霞亭の例であろう。その所要日数二十三日（一説二十二日）をもって茶山の江戸到着の日を計算するならば、茶山は二月十三日（一説によれば二月十二日）に着府しているはずということになる。以上のように考えてくる

と、富士川氏の二月二十日頃着府説はにわかには従いかねるものであること明らかであるが、それを証明する手懸りは、これまで全く知られていなかった。ところが、本書下冊十四丁裏には初度の東役の往路の作、「鳴海値雪。老夫雖疾坐輿行、赤脚扛丁踏破氷、鳴海駅東盈尺雪、馬声人語暁将盈」を載せている。茶山が霞亭と同じ旅程で東行したのであれば、鳴海に宿泊したのは二月三日前後のはずである。そのころ鳴海に「盈尺雪」が降ったことを記録する資料があれば有力な傍証となるはずであるが、残念ながら、いまだ見出すことができないでいる。

鷗外は、『伊沢蘭軒』その二十四に、「茶山は江戸について微恙のために阿部家の小川町の上屋敷に困臥し」と述べ、証として『黄葉夕陽村舎詩』巻之七、三丁裏に載せる「江戸邸舎臥病」二首を引いている。右の「鳴海値雪」の起句に「老夫雖疾坐輿行」というので、鳴海を過ぎる頃、茶山はすでに病んでいて、輿に乗って東行したことが判明する。『黄葉夕陽村舎詩』巻之七、三丁表に載せる「大道四首」の第四、箱根山を越えるときの作にも「輿疾何所憚」の句がある。日限までに江戸に到着しようとして、病をおして東行する茶山の姿が浮かんでくる。遅延したとしても、せいぜい一両日であったのではなかろうか。

本書に収める茶山の初度の東役中の作品で、最も注目されるのは、「泉伯盈招飲、分得韻青。伯盈、如来先／生門人。業儒。朱門争設醴、縫帳久談経、幽意招吟侶、清言倚画櫺、曾聞出藍器、今上草玄亭、徒弟更行酒、書帷燭影青」（上冊三十四丁裏、圏点筆者）であろう。本書上冊の三十九丁裏までを担当した第一の書写者は、担当した紙数が最も多かったせいか、四人の書写者中最も粗雑な仕事ぶりで、誤字も多く、俗間で通用していた略字であろうか、自己流の略字であろうか、判読に苦しむ略字を多用している。右の詩の圏点を付した「招飲」「今上草玄亭」の原文は、それぞれ、「飲招」「今上玄亭草」で、朱で記号を付して訂正が指示されている。

泉伯盈は、名は長達、通称斧太郎、伯盈は字で、豊州と号し、当時江戸では名の知られていた儒者の一人であったらしいが、閲歴を徴する資料としては、五弓久文編『事実文編』（関西大学東西学術研究所、一九七九～八一年）巻五十二に載せる樺島石梁撰「豊州先生碑銘」しか残されていない。それによれば、はじめ南宮大湫に学び、

大湫の没後は細井平洲に学び、平洲の女を妻にしたという。宝暦八年三月二十六日に江戸の茅場町で生れ、文化六年五月七日に五十二歳で没したというから、この年文化元年は四十七歳であったことになる。碑銘には豊州の通称を釜太郎としているが、通説の通り『江戸／当時諸家人名録』（文化十二年九月発兌）等の記載に従っておく。通説に異をたてるべき何の資料も持ち合わせていないからである。また碑銘によれば、幕府の「前軍寄騎」、すなわち先手与力になって本郷に移り、中年、職を弟直道に譲って帷を「郷南」に下ろし、教授したという。鷗外は『伊沢蘭軒』その十に、「所謂郷南の何処なるかは未だ考えない。」（二二頁）としているが、右にあげた『江戸／当時　諸家人名録』によれば、本郷元町である。また鷗外は「下帷郷南授徒」（同上）と引用しているが、『事実文編』に載せる碑銘は「授徒」を「教授」に作っている。豊州が致仕したのは何歳のときか明らかではないが、碑銘に中年というから、この年文化元年には既に致仕して本郷元町に住していたと考えて誤りあるまい。

初度の東役中、茶山が豊州に招かれてその居遊文館を訪れたことは、本書によってはじめて明らかになった事実のひとつである。茶山が右の詩の引に「伯盈、如来先／生門人。業儒。」と注しているところをみると、この日が初対面であったのであろう。如来先生は平洲である。豊州の著作は何ひとつ伝えられておらず、豊州その人に関しても碑銘のほかには片々たる資料しか存していないので、憶測するしかないのであるが、ここは、豊州が自らの意志で茶山を招いたと考えるよりは、第三者が両者の会見の仲立ちをしたと考えるほうが無理がないように思われる。豊州の門人に茶山に傾倒していた蘭軒がいるからである。蘭軒が経を豊州に学んだことは、鷗外が『伊沢蘭軒』その十以下に明らかにしている。また鷗外は、同書その二十四に、蘭軒の『蕣斎詩集』に、「春日郊行。途中菘菜花盛開。先是菅先生有養痾邸舎未尋芳之句、乃剪数茎奉贈、係以詩。」七絶一首がのせてあること、この七絶は『黄葉夕陽村舎詩』巻之七に載せる「江戸邸舎臥病。養痾邸舎未尋芳、聊買瓶花挿臥牀、遥想山陽春二月、手栽桃李満園香、」を踏まえて作られたものであることを指摘している。鷗外は、右のような蘭軒の行動から、「蘭軒は殆ど師として茶山を待ってゐたので

あらう。」（五〇頁）と推測している。茶山に出府の下命があったことを知って、蘭軒は鶴首して茶山の到着を待ち、旅中に患った病いを養っていた茶山をいちはやく藩邸に訪ねたと鷗外は考えていたようである。

この点に関して富士川氏は、『菅茶山』に「阿部正精候は侍医たる蘭軒を、小川町の茶山のもとへ見舞いかたがた派遣したのではなかろうか。」（上巻四五六頁）と述べ、鷗外の推測に異を立てている。当時の蘭軒の福山藩における身分を徴する資料を見出していないが、寛政六年十月二十八日に侍医として福山藩に召し抱えられた蘭軒の父信階が当時は健在で、蘭軒はまだ家督を相続していなかったのであるから、蘭軒が侍医にあげられるはずはないし、また、正精が医師を派遣して茶山の病いを見舞うとすれば、侍医等奥医師にではなく、表医師に命ずるのが制度上からいえば筋といえよう。奥医師の列にはもちろん、表医師の列にも加えられていなかったはずの家督相続前の蘭軒を、正精が茶山のところへ「見舞いかたがた派遣した」というようなことは、まず有り得ないといってよいかと思う。ここは鷗外説に従うのが穏当であろう。

はじめて茶山に接した蘭軒は、以後茶山に傾倒し、知友に茶山の人柄を吹聴してまわったらしい。鷗外は『伊沢蘭軒』その二十四に、この年文化元年三月十九日、蘭軒が病が癒えた茶山と犬塚印南・今川槐庵両名と共にお茶の水から舟に乗って隅田川に遊んだことを記して、「狩谷棭斎も同行の約があったが、用事に妨げられて果たさなかった。」（五〇頁）と述べている。棭斎は、蘭軒にとって、机を並べて経を豊州に学んだ親友中の親友である。しかし棭斎は漢詩を全く作らなかった。漢詩を作らなかった棭斎を蘭軒があえて舟遊に誘ったのは、自分の傾倒する人物を、親友であるが故にひとしく識ってほしいとおもったからであろう。ちなみに、鷗外は右の事実が『蘭軒雑記』に記載してあるかのように叙述しているが、慶応義塾大学医学メディアセンター蔵富士川游旧蔵蘭軒自筆稿本『蘭軒雑記』には、右の舟遊に関する記事は何ら載せていない。鷗外の錯覚で、『蕤斎詩集』と書くべきところを誤って『蘭軒雑記』と記したのであろうと推察するが、『蕤斎詩集』の所在が知れないために確認することができない。

漢詩を作ろうとしなかった棭斎までも茶山に引き合わ

せようとした蘭軒が、折々、遊文館で詩会を開くことがあったらしい師豊州を、茶山に引き合わせようとしなかったとは、考えられない。蘭軒が豊州に入門したのは十代のはじめの頃のことであったらしいが、国立国会図書館鶚軒文庫蔵蘭軒自筆稿本『市隠詩集』に、「遊文館集、送倉文学、得先韻」（三十五丁表）を載せているので、その後も引続き遊文館に出入りしていたことが証せられる。倉文学は中津藩の儒者倉成龍渚であろう。遊文館に茶山を招くよう豊州に勧めた人物がいたとすれば、蘭軒をおいてほかにはいないと考える所以であり、また蘭軒が仲立ちをしたからこそ、茶山が応諾したと考える所以でもある。残念ながら茶山が遊文館を訪問した日時を明らかにすることはできなかった。

本書に収める茶山の初度の東役中の作品で次に注目されるのは、「欲看上野花、路過犬塚印南、留飲至夜。欲尋鹿苑餞春華、却向竜門看筆花、莫笑萍蹤無定処、一尊乗興即為家」（下冊十五丁表）であろう。伊沢柏軒が書写を担当したところに載せる作品である。文化元年三月の作と推定する。

犬塚印南の履歴に関しては、東京都立中央図書館河田文庫蔵林家門人録原本『升堂記』天明四年の条に「七月廿三日／入塾／寛政三年辛亥三月聖堂啓事仮役／同年本役被仰付」と頭書して、「結城唯助　晁済／字子雲」と印南の入塾時の姓名を記載し、その右側に、「播州姫路浪人／改犬塚　後改名遜　字退翁」と、その身分と入塾後に姓名を改めたことが、また、左側に「町田長右衛門取次」と紹介者の姓名が記載されている。これによれば、姓ははじめ結城、のち犬塚、名ははじめ晁済、のち遜、通称は唯助、字ははじめ子雲、のち退翁、姫路藩（酒井家）の浪人で、天明四年に林家の八代洲河岸の塾に入塾、寛政三年に湯島聖堂の啓事役いわゆる都講にあげられた人物であることが判明する。印南を林家に紹介した町田長右衛門は安永八年入塾の薩摩藩士で、印南を林家に紹介した翌天明五年帰国した。また『続日本随筆大成』第一巻所収の釈雲室『雲室随筆』には、父は姫路藩の家老で、家督を継いだ兄甚右衛門が納戸金を使い込み、それが露見して処刑されたとき、印南も藩から追放され、妻子を身寄りの方へ預けて林家へ入塾したと伝えている。それが事実であれば、結城は世をしのぶ仮の姓であったということになる。同書に「其後聖堂大に革り、浪人書

生不残退塾被申付、両人も退塾」（九四頁）というから、聖堂が昌平坂学問所に改組された前後に退塾したのであろう。ただし、『升堂記』は、右の河田文庫本も、東京大学史料編纂所蔵林家寄贈写本も、印南の退塾の年月を記録していない。「両人」というのは印南と平井可大のことである。印南はその後は「本郷に卜居」（同上）したという。同書は印南の人物を評して「本より阿諛佞媚反覆表裏の物也。」（九五頁）としている。とかくの風評があった人物らしい。右の詩によれば、そういう人物を茶山は花見に誘い出そうとして、勧められるままにその家にあがりこみ、夜まで歓談したということになる。出府早々の茶山の耳にその種の風評が届くことはなかったのであろう。

『黄葉夕陽村舎詩』巻之七に、「同犬塚印南・今川剛侯・伊沢辞安泛墨陀川即事」七絶・七律各一首を載せている。鷗外は『伊沢蘭軒』その二十五に、これを文化元年七月九日の作として引用しているが、鷗外の錯誤で、同年三月十九日の作、すなわち前に触れた梜斎が同行を約していたが果たさなかったという舟遊のときの作であることを、富士川氏が「『伊沢蘭軒』標注（三）」（『鷗外全集月報』十八号、一九七三年四月）に明らかにしている。剛侯は槐庵の字、辞安は蘭軒の字である。鷗外によれば、『蕤斎詩集』に槐庵の名と字と号とが録されているという。とすれば、蘭軒と槐庵はこの日が初対面であったのであろう。したがって槐庵を舟遊に誘ったのは印南と考えてよいであろう。この詩をみると、三月十九日の舟遊は、上野へ花見に赴く途中立ち寄った茶山を引き留めて酒を勧め、花見の予定を妨げてしまった印南がその埋め合わせに企てた舟遊であったかに思えてくる。そうであるとすれば、これまで誰が企画立案したのか不明であった三月十九日の舟遊について考える手懸りを本書が与えてくれたことになる。

蘭軒は、前に触れた『蘭軒雑記』の冒頭に印南の談を書きとめ、「犬塚唯助、名遜、字退翁、号木王園、東都人、犬塚亦内の裔なり。」（一丁表）と注記している。またその次に「猪牙舟の対は如何と申せし時、犬塚の蛇目傘と答えしはおもしろし。」（同上）と書きとめている。初対面のときの印南の談を書きとめたものと推察される。蘭軒と印南の交わりは、知られている限りでは三月十九日の舟遊が最初である。茶山の「同犬塚印南・今川剛

侯・伊沢辞安泛墨陀川即事」の第一の七絶の起句に、「出餞韶華鴨觜船、」（四丁裏）という「鴨觜船」が猪牙舟のことであるとすれば、『蘭軒雑記』に書きとめられた犬塚の談二条は三月十九日の舟遊のときのもの、すなわち蘭軒と印南はこの日が初対面であった可能性がきわめて高いということになる。そうであれば、この日の舟遊に蘭軒を誘ったのは茶山ということになる。初対面から一ヶ月、茶山の蘭軒を親愛すること並みのことではなかったことが裏付けられるのである。

茶山がいつ印南と面識をもったのか明らかではないが、既述の「欲看上野花、路過犬塚印南、留意至夜」が作られた以前であることはまちがいあるまい。面識のない印南を花見に誘うはずはないし、花見に行く途中立ち寄ったと称して面識のない印南を訪問するような礼を失した行為を茶山がするはずがないからである。

本書には、右の詩の前に「暮春。神田／祠前。翠楼殊閣幾千叢、糸管紛々咽暖風、我本野麋鹿山伴、不宜久此軟紅中」（下冊一五丁表）が載せてある。神田明神の門前の料理茶屋にあがったときの作であろう。道をはさんで旧友柴野栗山が勤める昌平坂学問所がある。病が癒えた茶山が真先に訪れたのは学問所のはずである。あるいは学問所の関係者に案内されて料理茶屋にあがったのではあるまいか。「本野麋山鹿伴」を自称する茶山が自らの意志で料理茶屋にあがったのであれば、この作はなかったはずで、案内されてあがった茶屋であるから、違和感をおぼえて、結句に「不宜久此軟紅中」というのであろうと考えるからである。茶山が印南を識ったのはこの時とはいわないが、茶山の出府を歓迎する人たちが開いた宴席のひとつで、たまたま面識を得たのであろうと推測している。

本書に収める茶山の作品の多くは初度の東役以前のもので、富士川氏『菅茶山』の記述を補う多くの事実を知ることができるが、紙数に制約があるので、今回は以上のことを紹介するにとどめておく。

付記一　慶応大学医学メディアセンター蔵『蘭軒雑記』は『伊沢蘭軒全集』第七巻（オリエント出版社、一九九八年）に、慶応大学医学メディアセンター蔵『柏軒雑記』・国立国会図書館鶚軒文庫蔵『市隠詩集』は同八巻に影印されている。

付記二　文中の都立中央図書館河田文庫蔵林家門人録原本

『升堂記』は揖斐高・坂本陽美・林信子・本田美奈子諸氏編「林家門人録『升堂記』（都立中央図書館本）の翻刻と索引」（『成蹊人文研究』第二号、一九九四年三月）に翻刻されている。

本稿を草するにあたって、曾根静斎に関して神辺町の菅茶山記念館運営委員長菅波寛氏、ならびに同館館長福本靖弘氏より示教を得た。記して深謝する次第である。

（一橋大学助教授）